

SMC金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain SMC 豊島 健治

貸出？それより手数料（数値が語る銀行事情）

何のためにやっているのかと訊かれると困るのですが、私は毎日、株式、債券、為替の一部データをエクセルに入力しています（記録をとっている）。そして、幾つかのデータについては、月別データを記録しています。その中で、非常に気になる動きをしているデータがあります。それは、銀行の貸出残高と貸出金利の月別推移です。ここ2、3年、ずっと貸出残高は減り続け、貸出金利も下がり続けているのです。そこで、日銀公表資料から、銀行の貸出に係るデータ（の一部）を集め下に表にしてみました（1999年からとしたのはそれ以前のデータがない項目があるため）。

金額単位：兆円

	貸出平均 残高(a)	内中小企 業貸出残	内個人向 貸出残	内地公体 向貸出残	預金平均 残高(b)	預貸率 (a)/(b)	平均貸出 金利	国債保有 残高
1999/12	460	230	90	9	475	96%	2.100%	44
2000/12	452	234	92	8	468	96%	2.116%	68
2001/12	437	217	95	8	476	91%	1.880%	66
2002/12	419	199	98	9	493	84%	1.834%	72
2003/12	399	182	104	10	501	79%	1.799%	93
2004/12	389	180	103	11	508	76%	1.732%	102
2005/12	388	179	107	12	518	74%	1.623%	96
2006/12	395	188	106	13	519	76%	1.766%	88
2007/12	398	186	108	14	534	74%	1.945%	80
2008/12	416	185	111	17	543	76%	1.865%	93
2009/12	413	178	112	19	558	74%	1.655%	120
2010/12	405	174	114	21	568	71%	1.551%	146
2011/07	405	170	114	22	582	69%	1.501%	158

（注：中小企業貸出残及び地公体向貸出残最終は2011年6月）

（出所：日本銀行）

過去12年半の動きです。こうしてみると、日本の経済構造の変化が、銀行の融資動向にはっきりと表れていることが判ります。以下、幾つかの事実を指摘してみます。

（1）日本の銀行の貸出のピークは1995年頃でした。約535兆の貸出がありましたが、最近ではやっと400兆です。更に内訳を見ると、個人向け（主として住宅ローン）と公的部門で何とか底上げを図っていますが、企業部門が全くの不振です。中小企業向け融資など激減と云っていい状況です。

（2）デフレ効果かもしれませんが、預金は着実に伸びています。その結果、預貸率（預金残高に対する貸出残高の割合）が急降下しています。1999年には96%だったものが、今は70%をも切る有様です。「預金を集めるのが最も重要な仕事」等という銀行行動は遥か昔の姿となりました。

（3）その結果でしょう、国債保有残高が近年急激に増加しています。銀行の国債保有残高急増は、銀行の貸出不振とセットで語るべき状況となりました。当然乍ら、金利上昇に弱い体質となりました。

（4）更には貸出金利の静かな低下は、少ない良質な貸出を巡って銀行同士が熾烈な金利競争を行っていることを示しています。この事実は、貴社が未だ銀行に高い金利を支払っている可能性が高いことを示唆しています。

さて、それでは銀行はこれからどうなるのでしょうか。こうした数値を謙虚に眺めれば自ずと答えに近いものは出てくると思います。以下、私の推測です。銀行はますます手数料（金利ではない）確保に傾斜していきます。投信や保険その他手数料商品を積極的に勧めるでしょう（相殺規程に注意）。しかし、それでも現在の銀行、銀行員が全て生き残るのは難しい。いずれそう遠くない時期、都銀、地銀、第二地銀、そして信用金庫を巻き込んだ再編が起こってくる筈です。勿論、殆どの場合、今の段階で預金が不安に晒される（ペイオフの実行）ことはないと判断しています。金利が急上昇したときが問題ですが、それは別の問題として語る必要があります。いずれにせよ、没落して消えていくかどうかは個別銀行の経営者・経営陣の力量にかかるとなりました。そんなふうに思います。